

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

蔦原亮
博士後期課程

派遣先:マドリード自治大学

派遣期間:2011/09/27~2012/07/01

1. 概要

本派遣の目標は博士論文執筆のための広い意味での土台作りであった。具体的には、博士論文の方向性を具体的に定め、修士論文や拙稿、蔦原(2011)で指摘された、データの収集と扱いにおける問題点を改善させることを目指した。この二つの目標は（不満は少なからず残るが）達成できたといえるように思う。

本派遣は大きく三つの時期に分けることができるように思われる。以下に、各期に取り組んだ課題と成果、問題点について報告する。

1.1. 2011/09~2012/01

滞在前半のこの期間は、現地の大学院の講義への出席や先行文献を読むこと、生成文法、形式意味論、統計学、コーパスの運用等の方法論、道具立ての習得に時間を費やした。

一月末に、自治大学の Elena de Miguel 教授、コンプルテンセ大学の Luis García Fernández 教授と博士論文の方向性について話し合い、スペイン語各動詞形式が「どういった環境に生起するか」という点ではなく、「どういった環境に生起できないか」という点を調査するという博士論文の方針を得た。紙面の都合で詳述はできないが、前者のアプローチに比べ、各動詞形式の文法的性質を記述する際に、より有効であると思われる。

1.2. 2012/01~2012/04

滞在中盤は、先に述べた理念のもと、Si quieres, me *esperarás（もしよかったら、僕のことを待っててよ）.という条件文の帰結節で、動詞 esperar(待つ)を未来形で使用できない理由について考察した。Elena de Miguel 教授や Antonio Moreno Sandoval 教授、自治大学情報言語学研究室の大学院生らの助言と協力のおかげで、考察は論文としてまとめ、この研究成果は雑誌 CLAC、および、国際学会に提出した。報告者にとっては初めての海外誌、国際学会への応募であり、この応募のための作業を通じて、研究をまとめるということはどういうことなのかということを改めて考えることができた。

1.3. 2012/03~2012/07

派遣の後半では、習慣表現の各動詞形式による表出の不可能性について調査を進めた。具体的には、習慣表現を先行研究に基づき、「動詞形式単体によりあらわされる習慣」、「習慣の副詞と動詞の組み合わせによりあらわされる習慣」、「(英語の **used to** におおむね対応する)助動詞 **so**er によってあらわされる習慣」の三タイプに分け、スペイン語動詞各形式が、どのタイプの習慣をあらわすことができ、どのタイプの習慣をあらわすことができないか、またそれはどういう理由によるものかということ網羅的に記述することを目指すものである。

データの収集は、以前まで用いていたコーパスに加え、自治大学情報言語学研究室の口語コーパス、**Google Ngram Viewer** 等を用いて行った。また、習慣表現については形式意味論の枠組みで活発な議論が行われており、派遣前半に形式意味論を、本腰を入れて学んだことで、様々な視点からの先行研究にあたることができた。

現在は分析のテーマを「未来形は基本的に習慣の副詞と共起しないが、例外的に共起する場合はどういった条件が重なった時か」という点に絞っており、この考察は現在、収束しつつある。この調査・分析については、8月末に滋賀で開かれるスペイン語学セミナー **SELE** で研究発表を行い、フィードバック、助言などをいただくことで、より具体的な形に話をまとめていければと思っている。

また、自治大学滞在中、定期的に **Antonio Moreno Sandoval** 教授から計算言語学に関する指導をしていただいていたが、5月に、**Moreno** 教授、研究室のメンバーと共著での論文執筆を打診された。論文はスペイン語と日本語の形態素解析に関するもので、データの分析、論文の執筆を通じ、多くのことを学べると考え、協力させていただくことにした。

論文のテーマは、日西語の医学用語の形成に関するものである。より具体的に言えば、両言語の医学用語の形成のパターンの共通点、差異を明らかにすることを目的としている。スペイン語では多くの医学用語は接頭辞と接尾辞を合成することで形成される(例 **faring-**: 咽頭+**-itis**:炎症= **faringitis** 咽頭炎、咽頭痛)。一方、日本語では、「咽頭炎」の例からも分かる通り、必ずしも接頭辞、接尾辞の合成によって、医学用語が作成されるというわけではない。

スペイン語の主要な医学に関する接頭辞、接尾辞に対応する日本語の語のリストを作成し、そうした日本語における医学用語がどういった語と合成されるかを観察することによって、両言語の医学用語作成のパターンを特定することが最終的な目的である。

報告者は、滞在中に、日本語で書かれたテキストデータ収集、形態素解析ソフト「茶筌」による解析を終え、興味深いと思われる点をリストにまとめ、提出した。今後は **Skype** 等を通じ、打ち合わせを行い、執筆を進めていく予定である。

この作業中を通じて使用した形態素解析ソフト「茶筌」、簡易コーパス作成サービス **Sketch Engine**、自治大学の開発した二種のテキストの語彙使用を分析するためのプログラ

ム、ACL などの計算言語学における装置の性能、精度には率直に言って驚かされた。いずれは報告者本人の研究にも、こうした装置を有効に活用したい。現時点では、こうしたプログラムを利用しての具体的な研究、分析についての考えがあるわけではない。しかし、そういった道具立てが存在し、計算言語学者達がどのようにそれを活用しているのかを覗くことができたことも、本派遣の収穫だったように思う。

2. 成果と今後の課題

- ・無形の成果ではあるが、派遣を通じ、理論言語学の諸分野の枠組み、コンピューターを通してのデータの収集、解析法を学んだ現在、派遣前に比べ、成長できたように思う。特に、言語学は自然科学であるということを以前より強く意識することで、先行文献の読み方、データの見方が変わった。

- ・派遣中盤の条件文帰結節内における未来形の排除に関する調査は論文にまとめ、*Círculo de la Lingüística Aplicada para la Comunicación* に投稿し、現在査読の結果を待っている。

- ・上述の投稿論文は、未来形の不確実性という法価値が義務的モダリティと衝突することで未来形が排除されるのだと結論付けた。論文執筆後、未来形以外の不確実性を表す語、句と義務的モダリティの両立可能性について検討したところ、先の結論から予測される通り、基本的に両者は相いれないことが判明した。この件を秋のセビージャでの国際学会に提案したところ、幸いにも採択されることになった。

- ・滞在後半に取り組んだ習慣表現の件は、徐々にではあるがまとまりつつあるように思われる。セミナー、研究会などの場を積極的に利用し、足りない部分を埋め、論文なり学会での発表なりという形でまとめたい。

- ・また、完成にはまだ少し時間がかかると思われるが、自治大学情報言語学研究室のメンバーとの共著で執筆する論文も成果の一つであるように思う。完成に至るか、査読を通るかは別として、計算言語学に疎く、共同での論文執筆経験のない報告者にとって、貴重な経験になることは疑いようがない。

- ・こちらは無形のものであるが、スペイン言語学の各分野で第一線に立たれている自治大学、コンプルテンセ大学の先生方と知り合えたこと、自治大学の大学院生らと忌憚ない意見を交換できるような関係を築けたことも大きな成果であると考えている。